
こんな終わり方も、あってもいいよね。

ほむほむ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな終わり方も、あってもいいよね。

【著者名】

N4300S

【作者略名】

ほむほむ

【あらすじ】

ハッピーでバッドなエンド。そんな話を書きたかった。

辺り一面廃墟と化した街。そこらじゅうに横たわっている死体。首から上が無い者、上半身と下半身が別れた者、様々な死体がある。そしてそれらの頭上には ワルブルギスの夜。そいつは悠然と宙に浮いている。

ここはワルブルギスの夜の結界の中。外の世界にはまだ影響はないが、そのうち外もこと同じような光景と化すのは想像に難くない。

そんなこと絶対にあつてはならない、そしてそれを阻止できるのは私たち、魔法少女だけ。

何度も繰り返してきた時間の中で、その繰り返した数だけあいつに敗れてきた。まどかとの約束を果たすことも出来ずには……

そんな私が何百、何千と繰り返してきて倒すことのできなかつた敵を倒す、これは不可能に近い。いや、倒すことは簡単なのだ。

まどかが魔法少女になり、あいつに一発当てるだけで勝てる。勝てるが、それではいけない。私はまどかと約束したから。

まどかを魔法少女にさせない。これが私の唯一の友達であるまどかとの約束で、私が絶対に守らなくてはいけない約束だから。

だから私はそいつに何度も敗れてきた。私程度の力でそいつを倒すのは不可能とわかつていながら、挑み、敗れた。

だけど、そんな繰り返しも今回でおしまいだ。私には、まどかを魔法少女にさせずにやつを倒せる自信がある。

私の隣りには、佐倉杏子、美樹さやか、巴マミ。

今まで繰り返してきた中で、一度もなかつた 彼女たち全員がワルブルギスの夜を迎えるという、奇跡に近い現象が起こっている。

彼女たちと私、四人がいれば、あいつも倒せるだろう。今回失敗したら、おそらく一度目はないだろう。絶対に失敗は許されない。

「あなたたち、準備はいいかしら」「うん……」

「ああ、いつでもいいぜ。パートと暴れてやろうじやんつ」「うん……」

「いつもやりますか！ 杏子、足手まといにはなんないでよ？」「うん……」

「わたしも準備はできているわ」「うん……」

私の言葉に返す三人。その声質は強大な敵を前にしていると、ついに明るい。

本当に奇跡のようだと思つ。

魔法少女の真実を知り絶望した美樹さやかは、一度は魔女になりかけたが、佐倉杏子のおかげで魔女にはならなかつた。

巴マミは、元々のポテンシャルと経験から危機を乗り越え、佐倉杏子も同様に危機を乗り越えた。

絶対に負ける訳がない。根拠なんてものはないが、負けるなんてことはないと信じることができる。彼女たちも私と同じ考え方だらう。「みんな……」

私たちの後ろでまどかが心配そうな声を出す。彼女の足元にはインキュベーターがこちらを見ながら座つていて、まどかにはついてくるなど何度も言い聞かせたのだが、彼女は頑としてついてきた。だが、それもまどからしい。

「鹿目まどか。あなたはそこで見ているだけでいい。そこのキュウベえと契約する必要はないわ」

「そうだぞまどか。あたしたちにかかるばあんなのちょちょいのちよいだからさ、そこで安心して見ていいなさい！」

「うん……」

インキュベーターは何も言葉を発さず、ずっと私の顔を見つめている。何を思つて私を見ているのかわからないけれど、あなたの負けよ、インキュベーター。

「いくわよ」「うん……」

1 (後書き)

とつあべずHondを書きたかった。

自分としてほどのうち最初から書きたいなと思ひますけどね。

ほむほむかっこによお。

一番好きなのはマリヤとアリヤだじねー。

そしてーー、二話で完結します。

暁美ほむらの言葉で、彼女たち四人は一斉にワルブルギスの夜へと翔んで行く。

暁美ほむらは爆弾や機関銃を駆使し、佐倉杏子は槍で相手をけん制しつつ攻撃し、美樹さやかは剣で斬りつけ投擲し、巴マミはマスケット銃で援護をしている。

ワルブルギスの夜は、そんな彼女たちに照準が定まらずなかなか攻撃が当たらない。このままいけば勝てると誰の目からでも見えるだろう。

「みんな……」

しかしそう見えても不安がなくなるわけではない。鹿目まどかはそんな戦闘を見て不安そうな声を出した。

「まどか。ボクと契約したければいつでも言ってね。あれにまどかが加われば勝てるんだから」

鹿目まどかの足元から聞こえてくる声の主は、キュウベえ。彼女たちを魔法少女にした張本人だ。どんな願いも一つ叶える代わりに魔女と死ぬまで戦う運命背負わされる。そういう契約でキュウベえは少女を魔法少女にするのだ。

魔女は人々に災厄を振りまく悪者だ。魔法少女はその魔女を倒すために存在している。

悪者を倒し、人々を影から護る。端から見ればそれは正義の味方に見えるだろう。それは鹿目まどかにもそう見えていた。

だから鹿目まどかも魔法少女になりたいと願った。不器用でなんにもできないわたしだけど、魔法少女になれば人を救うことができる。キュウベえの言つとおり、わたしにすごい才能があるのだとしたら、それはきっと素晴らしいことなんじゃないか。

鹿目まどかには叶えたい奇跡なんものはなかつた。ただ純粹にみんなを護りたい、それだけで魔法少女になろうとした。

奇跡を捨ててまで魔法少女にならうとするなんて、なんのための契約か、一般人に理解はできないだろう。理解できなくとも良い。

そうしたいと思えるのが鹿田まどかだったのだ。

「……ううん、契約はしないよ。わたしはみんなを信じているから」「……そうかい」

だがそう思つていながらも、ここまでキュウベえと契約はしてこなかつた。

理由の一つは、人を護りたいから魔法少女になりたくても、契約には願いが必要なのだ。しかし鹿田まどかには願いがなかつた。そのため契約は遅れた。

一つ目は、魔法少女の裏を知つてしまつたから。キュウベえの口から明かされた魔法少女の秘密。魔法少女はやがて魔女になる。これは絶対に変えられない運命だと言われた。

そしてそれがキュウベえの言つとおりならば、自分が最強の魔法少女になり、やがて魔女になる、ということは最悪の魔女になつてしまつということでもあるのだ。

キュウベえの口から自分は宇宙をも凌駕する力を持つているらしく、そうだとするならば魔女になつた時には地球が滅亡してしまつのではないか。

そんなこと優しい鹿田まどかには許容できるわけがない。この力でみんなを救いたいが、魔女になつてみんなを苦しめたくない。

そんな思いが交差して、決断できなかつた。そして今でも答えは出でていない。

彼女たちを戦わせて、自分は後ろで立つていいのだろうか。キュウベえはああは言つてゐるが、もしかしたら魔女にならない方法もあるんじゃないだろうか。

そしてなにより、彼女たちが傷つくのを見たくない。

今すぐにもキュウベえと契約して助けに行きたい。だけど、彼女たちからは契約はしなくてもいいと、してはいけないと言われてるのでそれもできない。

鹿目まどかは、そんな想いを胸に抱きながらただ戦闘を見るしかなかつた。

そしてやはり、ワルブルギスの夜は強力だつた。

「さやかちゃん！！」

ワルブルギスの夜は最初は彼女たちに翻弄されてはいたが、徐々に体制を立て直していた。当たつていた攻撃も防がれるようになり、逆にワルブルギスの夜の攻撃が彼女たちに当たるようになつていて。そしてワルブルギスの夜の攻撃はとうとう美樹さやかの腹を貫いた。その攻撃によつて、美樹さやかの腹は半分ほど抉り取られ、地へ落ちていく。声は聞こえないが、戦つている彼女たちも美樹さやかに向けて何か叫んでいる。

鹿目まどかはその様子を見て、美樹さやかの名前を叫んだ。

「大丈夫だよまどか。いまはもう行動不能になつてしまつたけれど、さやかの治癒能力なら死ぬことはないよ」

魔法少女は、魔力によつて身体を治癒することができる。美樹さやかに当たつた攻撃は、魔法少女でさえも致命傷になりえるものであつたが、彼女の魔法特性は『治癒』。治癒の特性を持つ彼女ならば、戦闘には復帰できないが死ぬことはないだろ？。それを聞いて鹿目まどかは安心した。

しかし死ぬことはなくとも、美樹さやかの脱落は彼女たちにとつてものすごい損害となつた。連携を取るのが難しくなりワルブルギスの夜の攻撃は熾烈を極めた。

そして彼女たちはやがてそれに耐えられなくなり、脱落者を増やす。美樹さやかの次は佐倉杏子、その次は巴マミ。彼女たちは致命傷こそ避けたものの、この戦闘に復帰は難しいだろ？。

残るは暁美ほむらただ一人。戦況は絶望的である。

「なんで……なんでなの…………ねえキュウベえなんでなの…………」

鹿目まどかは、次々と倒れていく友達を見ながらそう呟くことしかできなかつた。

「はあ……。まどか、彼女たちにワルブルギス夜を倒せるわけがな

いじやないか

「 なんで！？ なんで言つてくれなかつたの！？」

鹿田まどかはキュウべえのそんな言葉を聞いて驚愕した。

「 だつて訊かれなかつたからさ。それに彼女たちは勝てると信じて
いたみたいだし、そこでボクが勝てるわけがないと言つても信じて
もらえないだろしね。…………それに、ボクは君に言つたじやな
いか、まどかがボクと契約してくれればワルブルギスの夜を倒せる
つて。そして、まどかは魔法少女にならないんだろう？ だつたら
彼女たちに戦わせるしかないよ」

「 そんなん……そんなんのあんまりだよ…………」

鹿田まどかはその言葉を聞いて涙を流した。田線の先ではいまだ
に暁美ほむらが一人で戦闘をしている。そしてその姿は満身創痍で、
あと少しもすれば彼女も地へと落ちるだろ。

「 ……まあまどか。もう一度訊くけど、ボクと契約する気はあるか
い？」

「 ……ねえキュウべえ？ わたしが魔法少女になれば、あれを
倒せんんだよね？」

数瞬経つた後、鹿田まどかはキュウべえにそう訊いた。田はワル
ブルギスの夜へと向けながら。

「 そつそー… まどかのありつたけの魔力をを使えばあんなのすぐに倒
せるよ！ まあまどか、契約するなら今しかないよ！ あのままで
は暁美ほむらは死んでしまう」

「 ……キュウべえ、わたし、みんなを助けたい。救える力を持つて
いるのにここのんきに見ているなんて…………。友達が死んじゃうのも
うなんて嫌だし、ママやパパ、そして街のみんなが死んじゃうのも
嫌だ。救えるならわたし…………。キュウべえ、わたしは力がほしい
い。あの魔女よりも、どの魔女よりも強い力がほしい」

「 まどか、君もやがて魔女になるんだよ？ いいのかい？」

「 うん、よくないよ。私が魔女になりそうになつたら自分でケリ
をつけるから」

そう言つてキュウべえへと顔を向けた鹿田まどかの眼は、赤く腫れていながらも決意ができた、軽い気持ちで決断したものではない、そんな眼であった。

「……君のその願いは叶えることができる。本当は無理なんだけど、まどかは特別だからね。それでもまどか、しつこよつだナビ本当にいいのかい？ 彼女たちの言葉に聞いて」

「うん。いいの。たぶんいつぱに怒られると悪ひナビ……だからね？」

？ 私を魔法少女にして」

「わかつたよ。契約成立だ、まどか」

「ダメ！ まどかああああ！」

遠くの方から鹿田まどかを呼ぶ暁美ほむらの声が聞こえてくる。

「ごめんね。ほむらちやん、みんな……」

さう謝罪を述べた鹿田まどかの体は、光に包まれた。

結局、護ることはできなかつたのか。

四人そろつても、ワルブルギスの夜は倒せない。確かに、私一人で戦うより弱らせることができた。だがそれだけだった。キュウベえが何も言わず私を見ていたのは、こうなることがわかつていたからなのか。そんなこと今わかつてしまつても、どうしようもない。

絶望感は感じない、ただあるのは虚無感だけだ。呆然とまどかが光に包まれるのを見ていることしかできない。全身の力が抜けていくのがわかる。元より脆弱な身体、魔力で強化しているとはいえ、その魔力も残り少ないとなつては意味を成さない。

予備のグリーフシードはまだある。地に倒れている彼女たちのおかげで、消費を抑えることができた。

だが、ソウルジエムにかざそうという氣力をえおきない。結局なにをやっても倒せないということがわかつてしまつたから。まどかを護ることは不可能ということがわかつてしまつたから。

そんな私がもう生きている意味なんてないだろう。ここで魔女になつて、まどかに討たれる。

思えば、私は人を殺しすぎた。まどかの友達も、一般人も。使い魔を魔女にさせるために見殺しにした人間も含めれば、それはもう馬鹿らしくなるくらいの人間を殺してきた。

人殺しは幸せにはなれない、という言葉がある。まさにその通りだと思う。

まどかのため、と思つて人を殺してきた。私は罪の意識に押しつぶされないように、まどかのためという正義という名のもとによそ見していただけだった。まどかを護ると言つておきながら、結局はそういうところでもまどかに護られていたというわけだ。

最初から最後まで護られていた。それがとても嬉しいくて、とても

悔しい。まどかに何一つしてやれなかつた。傲慢な考へだが、それだけが心残りだ。

ビルまる」と一つが、ワルブルギスの夜によつて私へ打ち出される。私にはそれを避けることも、防ぐこともできない。甘んじて受け入れよう。

おそらくこれが当たれば私は死ぬだろつ。だがそれでいい。私がいないほうが、みんな幸せになれる。それにもうまどかの泣く顔をみたくない。

ただ最後に。

私は、まどかと友達になれて幸せだつた

3 (後書き)

すんげえ短いけど許して

目を瞑り、これからぐるであるう衝撃に身を任せの体制に入る。直後に何かが爆発するような音が響き、私の体は吹き飛ばされる。痛みは感じない。なぜなら痛みを感じないように制御しているからだ。

私がこれまでしてきたことを垣間見れば、本当は痛みを感じさせないようにするなんていけないことなんだと思う。だけど私も死ぬのは怖い。人殺しが何を言っているのかと言われるかもしれないが死ぬのは怖いのだ。だからせめて温い考え方かもしれないけれど、痛みを感じずに死にたい。

そんなことを吹き飛ばされながら考える。どうやら即死ではなかつたようだ。意識もある。

そして吹き飛ばされること少し、ようやく壁に当たったようだ。その壁は、やわらかくてあたたかい、そして心が穏やかになるよう、そんな壁だった。

もしかしたらこれが死後の世界なのかも知れない。私は天国や地獄なんていう死後の世界なんてものは信じていなかつたけれど、もしこれがそうなのだとしたら、そういうものも信じてもいいのかもしない。

「ほむらちやん」

私の大事な人　まどかの声が聞こえる。

私はまどかに謝つても謝り切れない。まどかはいつも私に優しくしてくれたし、助けてくれた。

なのに私がまどかにしたことといえば、傷つけることだけ。ひどいことをたくさん言つたし、ある時はまどかの目の前でまどかの友達を手にかけたこともある。

決して私はまどかが嫌いなわけではない。むしろ私の頭の大部分を占めるのがまどかだ。

だからこそ、私にはそうする」としかできなかつた。言い訳にしか聞こえないけれど、そうすることしかできなかつた……

まどかに、みんなと仲良くしようと、と言われたとき、私がどれだけそうしたかったか。だけじゃうしてしまつと、さらにもどかを悲しませることがわかつてゐるからできなかつた。

「ほむらちゃん」

まどかのその声がとても心地よい。まるで子守歌のようだ。

「ほむらちゃん」

まどか、ありがとう。もういい、私はもう十分だ。まどかにはワルブルギスの夜、そしてこの後魔女になる私を倒して終わりにしてほしい。

一時凌ぎにしかならないと思つけれど、私が持つてゐるグリーフシードをまどかに渡そう。それがあればとりあえず今は誰も悲しまない。

「ごめんなさい。許してほしいとは言わないけれど、どうか私のことを忘れないでほしい。結局約束は果たせなかつたけれど、私がやつてきたことを無にしないように、まどかには私のことを覚えていてほしい。それだけで私がいた証拠になるから。

「ほむらちゃん」

私はさつきまで聞こえていたまどかの声は、死後の世界か、あるいは走馬灯のようなものかと思つてゐたが、まどかが私を呼ぶ声が止まないことに疑問を持つた。

今気づいたが、私が体を預けてゐる壁、震えている気がする。

「ほむらちゃん!!」

「…………まど……か…………？」

疑問に思つた私は、瞑つてゐた目を開けてみた。あれだけの攻撃を受けたといふのに、体は動く。

そして目を開けたそこには まどかがいた。

「ほむらちゃん!!……よかつた……」

「…………どう、して……？」

現状に頭が追いつかない。

「どうしてつて……あのままだつたらぼむらうりやんが死んじやうと思つたからだよ！」

「私は……あなたにたくさんひどいことをしたの……」「うん……。わたしはね、ほむらうりやんが優しい人つて知つてるよ？　今までわたしに言つてくれたことは、わたしのためを想つてのことだつたんだよね？　さやかちゃんやマミさんにもいろいろきついこと言つてたけど、なんだかんだ助けてくれたし。むしろわたしが謝らなくちゃいけないよ。ぼむらうりやんの忠告に背いてキュウベえと契約しちゃつた」

「いいの……もう、いいの。それよりもはやくワルブルギスの夜を」「うん」

「まどかを責める」となんてできない。私では結局倒すこともできぬし、それにまどかが魔法少女にならなければ、この街は消滅していただろう。

それはわかつてゐる。わかつてゐるけれど、私はこれからどうすればいいのだらう。

ワルブルギスの夜が終わり、まどかが魔女になり死んでしまえばまた私は時間を遡る。そしてあの病室で目を覚ますだらう。けれど、もうまどか抜きではワルブルギスの夜を倒すことなどできないうことがわかつてしまつた。

ソウルジエムは、絶望やストレスなどの負の感情によつて穢れていく。いままでは、まどかとの約束を果たすためだと、希望を持つてやつてこれた。

しかし、それは叶わないことだと知つてしまつた。あとはただ魔女になるのを待つだけしかない。そしてそれは今じゃなくとも、すぐ訪れるだらう。

まどかがワルブルギスの夜に向かつて口を開く。

その姿は、私が初めてまどかの魔法少女姿を見たときを思い出させる。

あの時は何も知らず、まどかのその姿がとてもかっこよく見えた。子供のころよく見ていたアニメの主人公のようだと思った。

矢を放つまどかの姿や、敵の攻撃を避けるまどかの一撃一動に興奮したし、大人気なくはしゃいでいたと思う。そして、希望に溢れていた。

それが今では、魔法少女の真実を知り、厳しさを知り、呪った。だけど、まどかとの約束というただひとつの中止を胸に諦めずやつてきた。

だけど、その希望も打ち砕かれた。

『』に番えた矢の輝きが増していく。その輝きは、今までに見たこともないような輝きだ。まどかがインキュベーターに何を願ったかは知らない。だけどその願いは、私や巴ママたちでは叶えられないほど大きなものなのだとわかる。

おそらく今までのまどかよりもここにいるまどかは、最強だろう。そして最悪の魔女になるだろう。

まどかがそんなことを許すわけがない。おやらぐ、まどかは魔女になりそうになつたときは自殺するつもりなのだろう。

今は私がグリーフシードを持っているからすぐに魔女になるといふわけではない。だけどそう遠くない未来、まどかは魔女になる。そしてまどかが死んだ瞬間、私はまた時間をやり直す。私はもう時間に戻る意味を見出せなくなつたから、病室で田を覚ました瞬間魔女になるかもしれない。

いやだ。死ぬのもいやだし、まどかとの約束を果たせないのもいやだ。そして、覆すことができないのもいやだ。

「まどか……ごめんなさい……！」

私は矢を放つまどかを見て、そういつひとしかできなかつた。

4 (後書き)

忙しすぎてなんにもできない。
そんなの絶対、おかしいよ。

まどかの放った矢がワルブルギスの夜へと一直線に向かっていく。矢がワルブルギスの夜に近づくにつれて、強かつた輝きがさらに強くなつていき、ワルブルギスの夜にたどり着くころには目を開けていられないほど輝きになつた。

私がその輝きに目を当てられず瞑つてゐる間、これはワルブルギスの夜の断末魔なのか、泣いてゐるのか、それとも喜んでゐるのか、ただの悲鳴にも聞こえるワルブルギスの夜の声のようなくわからぬ音が響き、輝きが収まるころには、廃墟だけを残してワルブルギスの夜の姿は無くなつていた。

……すごい。私たち四人が太刀打ちできなかつた相手が、たつたの一発で、今までに見たこともない圧倒的火力でまどかはワルブルギスの夜を打ち倒した。

まどかはいつも、自分は不器用だ、何にもできないなどと言つてゐるけれど、そんなのとんでもないと私はずつと思つてゐる。

たしかに、まどかには日常生活においては突出したものはないかもれない。けれど、人を思いやる気持ちは誰よりも尊いものだし、なにより誰にもできないこと　　まどかの力で世界中の人の救うことができることができる。

誰もが一度は夢見るだろう、自分がヒーローになつて人々を救う。私たち女が全員そう思うかはわからないけれど、男は何かしら強い自分が悪者を倒し、人々を救うその姿を妄想なりするだろう。

しかし普通に生活し時間がたてば、それらは過去の恥ずかしい思い出として封印し、そして未だにそんなことを妄想している者を笑いものにする。そして、自分を犠牲にして人を救うなど愚かだと思うようになつていく。

そんな誰にもできないことをまどかはできるのだ。人々に希望を与えることができる。それは笑うものでないし、とてもすばらしい

ものだ。

しかし、そうは思つても私は素直に喜ぶことはできない。

私はまどかと違つて人々を救おうなんて思つていらない。私はまどかとの出会いをやり直すために魔法少女になり、そしてまどかを魔法少女にさせないという目的に変わった。

たしかに、魔法少女になった当初はこの力で人々を救うのだと意気込んでいた。けれど、そんな意気込みは次第に消沈していき、そしてまどかの邪魔になる人間を殺すのも、無害な一般人を殺すのも厭わなくなつていった。

だから私はすばらしいとは思うけれど、喜ぶことはできないし、逆に、最初からまどかが力を持つていなければよかつたのに、そちらへんの女子中学生でよかつたのに まどかがいなければ何万人も死んでしまうとはわかつていながらも、そんないけないことを思つてしまふ。

「まどか！」

ワルプルギスの夜の消滅を確認した直後、矢を放つた姿勢のまま立つていたまどかが糸の切れた人形のように倒れたのを見て、私はまどかに駆け寄り、地面に体を打ち付けてしまわないように支える。

「ほむら、ちゃん……ごめんね」

「喋らなくていいから！」

まどかは私の顔を見ると、心の底からそう思つているのだろう、申し訳なさそうな顔で私に謝つてきた。そして苦しそうな顔にすぐ変わつた。

ワルプルギスの夜を一撃で倒すほどの魔力を使つたのだ。まどかの全魔力を使つたのだということはわかる。

ということは、まどかが魔女に今すぐなつてもおかしくない状態ということだ。その証拠としてまどかのソウルジエムは黒よりも黒いといいくらいに穢れている。

まどかを叱るのは今じゃなくてもいい。そしてそれは私の役でも

ない。

「いますぐグリーフシードを……！」

私はすぐさま予備のグリーフシードをまどかのソウルジュムにかけました。

「…………？」

私はグリーフシードを限界まで使ってまどかのソウルジュムに当てたはずだ。現に、グリーフシードは限界に近い。なのになぜ

「　なんでまたたくソウルジュムが浄化されない…………！」

まどかのソウルジュムがまったく浄化されない。

グリーフシードは通常、魔法少女の魔力量にもよるが、ソウルジュムの穢れを二回ほど浄化できる。それならばまどかの魔力量が規格外だとしても、ひとつかふたつのグリーフシードを使えば完全とは言わないまでも、ある程度は浄化できると思っていた。

しかし、グリーフシードを一つ使ったのに、まどかのソウルジュムに変化はない。使う前と同じ、黒よりも黒、といつくらいに穢れている。

「まどか、やだ、まどか…………」

「ほむ、ら、ちゃん…………」

私はもう一つ残っていたグリーフシードをまどかのソウルジュムにあてがう。しかしそれでもまったく変わらず、まどかのソウルジュムは穢れたままだ。これでは、まどかが死んでしまう…………！

「曉美ほむら。たかが三つのグリーフシードじや鹿田まどかの穢れを浄化することはできないよ」

「…………インキュベーター…………あなた…………！」

いま一番目にしたくないものが目の前に現れた。そして浄化できないことを知つていながらなぜ　　「こいつはそういう生き物だ。自分の不利になるようなことは言わない。

「鹿目まどかの力は、想像を絶するものだ。そして、溜め込む呪いもそれ相応のものになる。まどかが僕と契約するときに言った願いを君は知っているかい？」

「知るわけないでしょー！」

「まどかはボクにこういったんだ『わたしは力がほしい。あの魔女よりも、どの魔女よりも強い力がほしい』とね。それがどう意味するかわかるかい？」

「なにが言いたいの！？」

インキュベーターのいつも通りの態度にイラつき、まどかが危ない状況なのも合わせて自然と声が大きくなる。

「落ち着こうよほむら。……つまりは、まどかはどの魔女よりも強い力　言い換えればすべての魔女を倒す力を望んだんだ。簡単に言つてしまえば、すべての魔女を倒す力を得、すべての魔女の呪いも背負うことになった、というわけだ」

「そんな……そんなこと……」

「ほむらちゃん……わたし、自分が魔女になりそうになつたら、自分でケリをつけようと思つてたの」

私がインキュベーターの説明を聞いて放心しているとき、私の腕の中にいるまどかが私に向かつてそんなことを話し始めた。

「……知つているわ」

「ふふ、そうだね」

そんなことはわかっている。まどかは苦しそうな顔をしながら、楽しそうに私の顔を見つめる。

「それでね、わたしのお願い、聞いてくれる……？」

「つ、いやよ」

お願い、そんなもの考えるまでもなくわかる。まどかが私に何をお願いするかなんて、私は経験で知つている。

「そんなこと、言わない、でよ、ほむらちゃん」

「いやなもののはいやよ……なぜ私があなたの願いを聞かなければいけないのかしら」

今までの私なら、次があると信じてまどかの願いを聞き届けていただろう。

しかし今回はそうはいかない。なぜなら私には次がないからだ。

「わたしね、魔女になりたく、ないんだ。だからほむらちやん、お願い……私のソウルジェム、を、壊してほしいの」

言いながらソウルジェムを私に差し出してくる。やめて、やめてほしい。

「お願い、ほむらちやん。ソウルジェムを

「いやよつ！ だつてまどかが死んでしまつたら私は

もうまどかに会えなくなつてしまつじやない！

その言葉が出る前に、まどかを強く抱きしめる。まどかは私の行動に戸惑っているようだが、そんなの関係ない。私は絶対まどかのソウルジェムを壊したりなんかしない。

最後はまどかと一緒に場所で死にたい。病室で一人寂しく魔女になるなんてごめんだ。

そんな考えが思い浮かび、なんて自分は最低など心の底から思った。

まどかは私のため、みんなのため自らの命を捧げたといつのに、元の私といえば、散々人を殺してきたのに、死ぬのを怖がり、いざ死は避けられないと知った途端、まどかのお願いも聞き入れずにこうやって抱きしめている。なんて自分勝手なのだろう。そんな自分に対して思わず笑ってしまうだ。

まどかはそんな私を見て笑うだろ？……いや、笑わないだろ？

「ひとつ、ボクに提案がある」

私に説明をしたきり、たやすく私たちを見ていたインキュベーターが突然そんなことを言った。

5 (後書き)

ちょっと無理やりすぎたかも。

「いや、提案といつよりボクと契約してほしいことがあるんだ」「…………インキュベーター、あなた今この状況をわかつて言つているの……！？」

「あたりまえさ。むしろ君にとつて得なことだと思つただけれど、
暁美ほむら」

私の目の前には瀕死のまどかが、少し離れた場所には満身創痍の美樹さやかたちが倒れている。そして立つていられるが私も限界に近い。この誰が見てもどうしようもない状況で契約を持ち出すインキュベーターを問い合わせたが、インキュベーターの返答はいつも通り。いつもならそれに腹を立てるのだと思うのだが、いまは何も思わない。私が死ぬまで黙つっていてほしい、そんなことを思う。

「あなたと契約するつもりなどないわ。それについているんでしょう？ 私がこの時間軸の人間ではないことを。このあと結局私は戻ってしまう……どうでもいいことよ。それに私は一度あなたと契約している。再度契約なんてできるわけないでしょう。それはあなたが一番わかっているのではないの？」

そもそも土台無理な話だ。魔法少女は奇跡を対価にしてなるもの。そしてその契約は一度きりだ。再度契約なんてできるはずがない。もし何かしらの方法で契約ができたとしても、私は結局この場で死ぬかあの病室で魔女になるしか道が残されていない。私に得があると言つても、ワルブルギスの夜を倒せるほどの力は手に入れることはできないだろう。

そして、これは私の憶測　いや、確信しているが、インキュベーターは私の正体を知つてている。今回、私はまどかにも誰にも私の力の正体を話していない。それにインキュベーターにも感づかれるような力の使い方はしていないはずだ。それなのに、ところどころ私の力を知つているような言動や行動が見られた。どうやってイン

キューベーターが知ったのか知らないが、私に契約を持ち出すなんて意味の無いことだと本人が一番わかつているのだと思うのだが。

「……そうさ、？ 時間遡行者？ 暁美ほむら。君はなぜボクが知っているの疑問なんだろうけど、ボクと契約してくれるというなら教えよう。そして君は再度契約できないと言つたけれど、それは魔法少女になるための契約だ。契約自体は何度でもできる。ただボクたちが新たな契約をするに値するときにしかその話はしないけどね」

「それがなに？ 私はあなたとは契約はしないと言つていいでしょ。さつさと消えなさい」

「……ボクと契約すればまどかが救えるとしてもかい？」

「……なに？」

インキュベーターはそんなことを言つ。私は繰り返してきた時間の中で、何度もインキュベーターにまどかを救う手段はないのかと問い合わせてきた。そして帰ってきた返事はいつも同じ、そんな手段は無い、できないというものだった。

「ほむらがボクと契約すればまどかが救えるんだよ。どうだい？」

聞く気になつたかい？」

「ふざけないで。もうまどかは救えないわ。あなたは嘘までついて私に契約してほしいらしいけど、私がそんなものにかかるわけがないわ」

それがいま、インキュベーターはまどかを救えると言つている。今までインキュベーター自身がまどかを救えないと言つてきたのだ。それがいまさらまどかを救えると言つても、信じる信じない以前に破たんしている。

「……そうだね。君は今までボクにまどかを救えないと言われてきたんだつたね。できないと思うのも仕方ない。そうだな、ほむら、どうして今までボクが君にまどかを救うことができないと言つていたかその理由がわかるかい？」

「そんなの、できないからでしょ」

「違うんだほむら。鹿目まどかを救うことはできた。ただ、救う意

味がなかつただけさ

「意味がなかつた？」

「そつ。ほむらはどうして僕が少女と契約するか、その意味を知つているよね？」「

「感情のエネルギーを集めるためでしょ」

「そうだ。多感な時期の少女と契約して喜怒哀楽、様々な感情をエネルギーとしてもらい、不確定要素の塊である感情というものを解明するのがボクたちインキュベーターの目的だからさ」

インキュベーターには感情がない。もともとこいつらの種族には感情をもつたものはいないらしい。いつの時間だったか、インキュベーターが言つていた。そして感情というものを解明するために少女と契約して感情のエネルギーを得るのだといつ。

「それで、それがまどかを救うというのどこが関係していたのかしら」

「ほむら、感情のエネルギーを手つ取り早く集めることができるのは、魔法少女が魔女に変わる瞬間なんだ。そしてまどかはすさまじい力を持つ魔法少女で、魔女だ。ということはエネルギーも相当なものになる」

それは私が一番わかつている。まどかは魔女になる、それだけで一つの星が滅びてしまう力を持っている。

「まどかが魔女になるだけで、解明に必要なエネルギーを十分補うことができる。だから魔女にする理由はあれど、救う理由はなかつた」

「なら今回も変わらないじゃない。よかつたわね、まどかのエネルギーがとれて。そしてこれからは邪魔をする私もいなくなる。……疲れたわ。消えなさい」

一瞬、耳を傾けた私が愚かだった。まどかが魔女になりこの星は滅びる。インキュベーターには地球はただの使い捨ての道具に過ぎない。それはわかつっていたはずだ。

「ボクの話をきいてくれほむら。ボクは意味がなかつたと言つたん

だ。だけど、いまはまどかを救つ意味がある

「……続けなさい」

「ボクはすでにエネルギーを相当量獲得しているんだよ
むら、君のおかげでね。そしてこれからボクたちの計画にはまど

ほ

かが必要になる

6（後書き）

なんか中途半端なところで切れてるけど勘弁。
まだかマギカ最終話が放送されてもう一ヶ月もたつてますが、この
話の内容を考えたのは最終話放送前です。そのためおかしなところ
があるとおもいます。すいません。
遅筆万歳！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4300s/>

こんな終わり方も、あってもいいよね。

2011年5月29日00時40分発行